

長崎県農林技術開発センター・農業大学校施設整備事業

設計概要

(令和7年6月)

1. 計画概要

(1) 敷地概要

所在地	長崎県諫早市貝津町		
敷地面積	28,712.14㎡		
地区計画	都市計画区域 市街地調整区域		
防火地域	指定なし		
接道状況	なし（農林技術開発センターの管理道路 幅員：6.450m）		
基準建蔽率	60%	基準容積率	200%

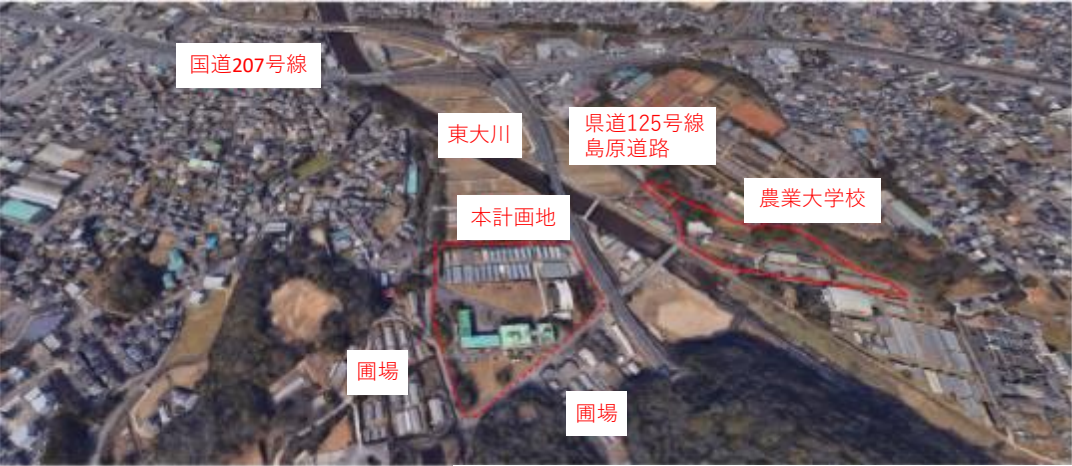


図2：航空写真“google earthより引用”

(3) 建築概要

・新築建築物 延べ面積：5,908.97㎡
建築面積：3,866.26㎡

	本館	その他
		車庫・駐輪場等(合計)
延べ面積(㎡)	5,260.47	648.50
建築面積(㎡)	3,264.46	601.80
最高高さ(m)	9.56	2.56～4.84
耐火性能	耐火(任意)	準耐火等
規模	地上2階	地上1階
構造	RC造 一部S造	S造 またはRC造

(2) 鳥瞰イメージ



(4) 事業スケジュール

区分/年度		令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度
設計	基本設計	●	●				
	実施設計		●	●			
工事	建設工事			●	●	●	●
	解体工事			●	●	●	●
運営						●	●
						●	●

1. 計画概要

(5) 基本的な考え方

農林技術開発センターと農業大学校を、「スマート化・グリーン化等に対応できる人と産業を育成する農林業の総合拠点」として一体的に整備することとし、以下の考え方で基本設計を行いました。

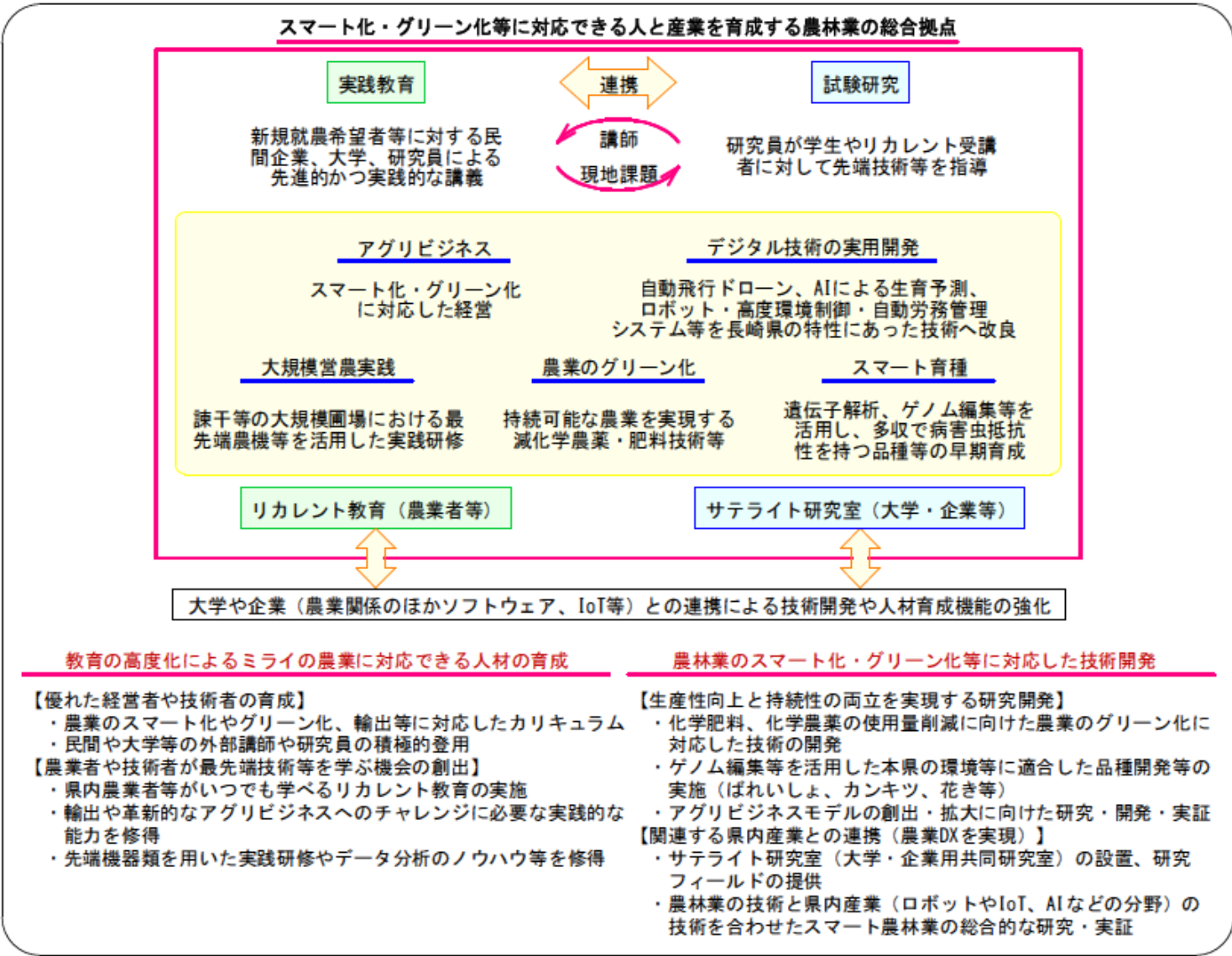
■施設整備のポイント

- ・教育の高度化及び産学連携の加速化を図り、民間企業・大学等が使用可能なサテライト研究室を設置し、実習・実験室は研究員・学生・企業・大学で共同利用します。
- ・先端技術を活用した研究内容や研究成果等の早期普及を図るため、研究員が、学生や農業者、現場指導者等に対して先端技術等の指導や講義を実施します。

(6) 配置計画の考え方

■配置計画概要

- ・今回計画のメインの建物である本館は、北側のハウス等への日影の影響を考慮し、ハウスが日影となる時間と範囲を現在の建物によるものより短くかつ小さくする位置に配置した、2階建ての低層で中庭（吹抜）を有するロ型形状の建物です。

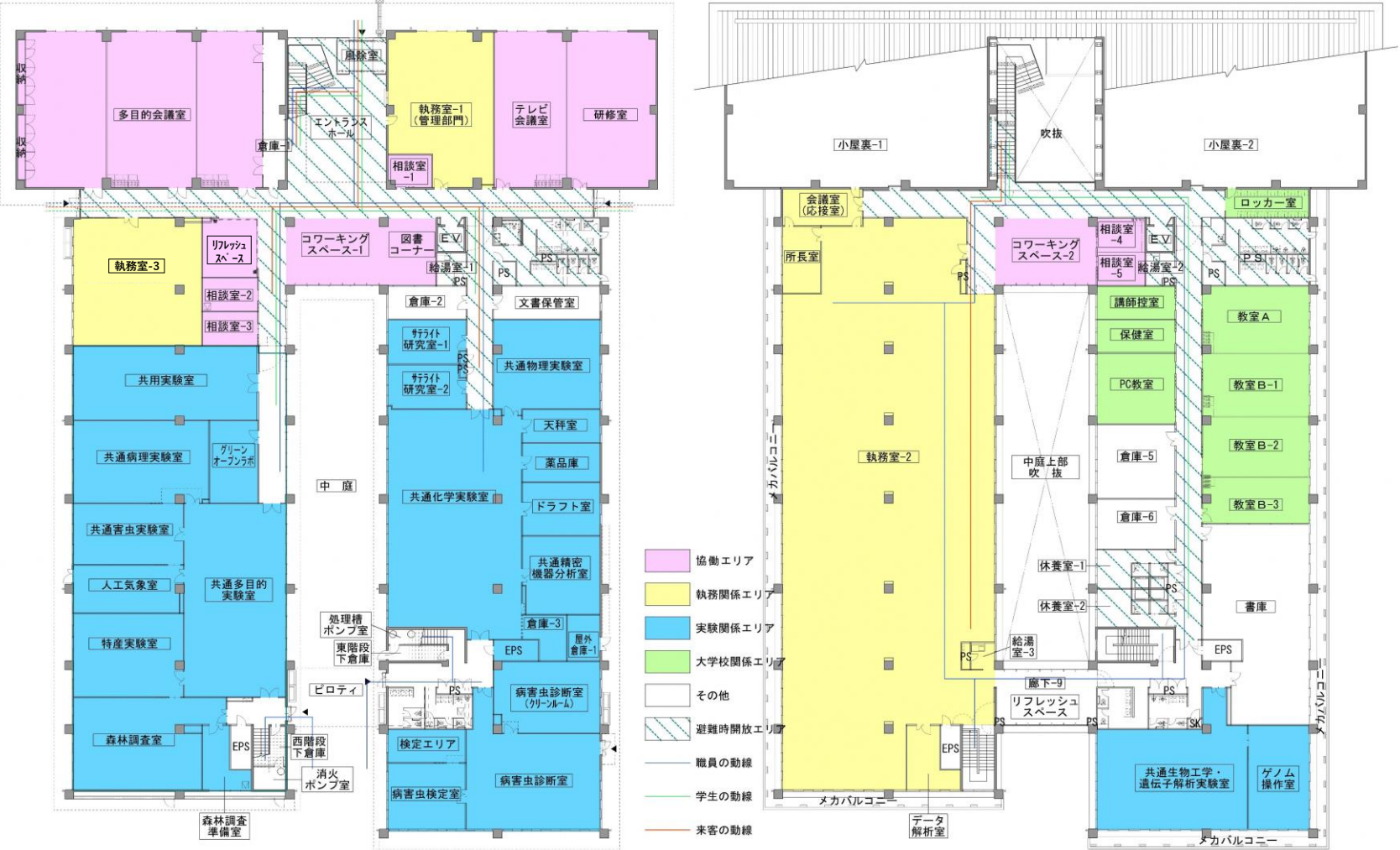


2. 基本計画

(1) 平面計画の考え方

■明確なゾーニング

- ・建物を分棟化し、北棟中央に位置するエントランスホールを中心として各エリアを明確に区分し、配置します。それらによって、わかりやすく利便性が高い、セキュリティ面でも安心安全な施設とします。
- ・施設内の動線はコンパクトで交錯のない、利用しやすい計画とします。



1階平面イメージ

2階平面イメージ

協働エリア

- ・吹き抜けのエントランスホールを中心に各会議室やワークスペース、相談室等を配置した「協働エリア」を設け、研究職員や学生、企業などのさまざまな人が交流できる空間とします。

農業大学校関係エリア

- ・農業大学校エリアは東棟2階の北側でエントランスホールやワークスペース等の「協働エリア」に隣接した配置とします。

実験室エリア

- ・実験室は主に東西の棟の1階へ分散配置し、一部は東棟2階の南側へ配置します。
- ・研究設備は極力集約して効率化を図り、異なる専門分野の研究交流が促進される開放的な空間とします。

避難時開放エリア

- ・諫早市の指定避難所として開放し、被災者を受け入れる室は、多目的大会議室、テレビ会議室、研修室、教室とします。

執務関係エリア

- ・主要な執務室は西棟2階に集約し、オープンなワンフロアとして各部門の交流を促す計画とします。
- ・窓口機能も担う管理部門は1階エントランスホール付近へ設けます。

(2) 構造計画

■構造設計の要求性能

- ・今回計画の建物は学校・試験研究施設として、耐久性、耐震性および経済性を十分考慮した設計としています。
- ・構造体の耐震性能は、国土交通省大臣官房官庁営繕部監修「官庁施設の総合耐震・対津波計画基準及び同解説」および「建築構造設計基準及び参考資料」に従います。

■耐震安全性の分類

部位	分類	該当
構造体	I 類	—
	II 類	本館
	III 類	付属棟
建築非構造部材	A 類	本館
	B 類	付属棟
建築設備	甲類	本館 (研究施設の一部)
	乙類	本館 付属棟

■構造設計の基本方針

- ・今回計画のメインの建物である本館は、2階建ての低層で中庭（吹抜）を有する、口の字型の建物です。全体を構造上一体として計画しますが、中庭（吹抜）部分を挟み、分かれた東西の棟のフレーム部分は、各々のフレームでも安全検討を行い、より耐久性と耐震性に考慮した設計としています。

(3) 環境配慮計画の考え方

■環境配慮計画の基本方針

- ・今回建物は計画年数を100年と考え、長寿命化を図ります。
- ・高強度コンクリートや耐久性の高い仕上げ材を選定し、建替えやメンテナンスの周期を延ばすことで、ライフサイクル全体での工事の回数を減らし、工事の際のエネルギー消費やCO₂の発生を抑えます。また、これらはライフサイクルコストの縮減にもつながります。



2. 基本計画

(4) 内部空間デザインの考え方

■「協働エリア」

- ・ エントランスホールやコワーキングスペースを中心とした「協働エリア」は職員や学生、企業、他大学等との日常的な交流空間となります。そこでは、柔軟な発想や自然な交流が生まれる雰囲気をつくるため、内装は開放的で活気があり、居心地の良い空間とします。
- ・ 1階のエントランスホールやコワーキングスペースは、床の仕上げ材に県産材（諫早石）を活用した材料を採用し、天井は県産木材を活用したルーバー天井とし、中庭に向けて勾配天井であげることで、カジュアルで親しみのある開放的な空間とします。

■「執務エリア」

- ・ メインの執務室はオープンなワンフロアとして、什器やパーテーションを用いてフレキシブルな計画が可能です。また、各執務室や隣接する廊下を含めて、床下地にO Aフロアを採用し、将来的なレイアウト変更などの更新性に配慮した計画としています。

■「農業大学校エリア」

- ・ 講義を行う、学習空間として学生が集中できる環境とするため、シンプルで明るい空間とします。
- ・ 吸音効果のある天井材や遮音性の高い間仕切壁を採用して、音環境にも配慮しています。
- ・ 連続する教室間の壁は移動間仕切りを用いて、大きな1教室としても利用できる計画としています。

■「実験室エリア」

- ・ 各部門が共用するオープンな実験室はスケルトン天井とし、フレキシブルに配管や配線、実験設備の更新を行える計画とします。また、スケルトン天井によって、明るく開放的な空間となります。
- ・ 各部門の専門的で清潔さや精密さ、気流や空気の密閉度等の求められる実験室は個室化して、実験内容に合わせて、自然光や外気を取り入れる窓の計画や設備計画を行っています。
- ・ 仕上材は実験内容に合わせて、耐薬品性や耐水性、清掃性に考慮して選定しています。

■「その他」

- ・ 内装の色彩の切替えによってセキュリティーゾーンや通路部分などを視覚的に認識できる計画として、利便性や安全性に配慮した計画とします。

■エントランスホール内観イメージ



■天井木質化のイメージ



■スケルトン天井のイメージ



■外観のイメージ



(5) 外観デザインの考え方

■長崎県の農業の中心施設としてふさわしいデザイン

- ・ 長崎県の農林業の「知の拠点」となる施設として、周囲の自然な環境へ調和したデザインとします。
- ・ 建物のメインファサードとなる北側は周囲の地形に沿った勾配屋根として、その土地になじみつつ、存在感のある建物とします。
- ・ メインファサードはシンメトリーなデザインとし、研究や執務空間の入る東棟と西棟は、日よけルーバーや柱が連続する規則的でリズムカルなデザインとすることで、知の拠点として格調があり端正な印象を与えます。
- ・ 農林業の基本となる「土」を連想させるレンガの風合いをデザインのポイントとして用い、自然でやわらかな印象を与えます。